

日英語における動詞の様態 —日本語の補助動詞を中心に—

青 井 潔*

Modal Function of Japanese and English Verbs —With Special Reference to Auxiliary Use of Japanese Verbs—

Kiyoshi Aoi*

(Received September 1, 1970)

This paper discusses the features of the Japanese verbs in auxiliary use in an attempt to find some hints on translation into English. The use of some verbs preceded by the participle *-shite* is classified according to the function and meaning each one has as indicator of manners of action. The combination, for instance, of *-shite* with *kureru* implies an act which is looked upon as a favor with a sense of gratitude due to the performer, while reverse is the case with *-shite* and *yaruu*. This time it denotes a service given with a sense of beneficence on the part of the performer.

A variation of passive voice is given by *morau* preceded by the *-shite* participle. *Kuru* and *iku* indicate the transitive process of actions and circumstances in terms of space and time. *Oku* gives notions of a preparatory conduct for something following, the state of nonintervention in certain affairs, and a temporary solution to a situation of the moment, while an act of experimental nature is signaled by *miru*. For the convenience of comparative study, each example is provided with a translation in the corresponding language.

まえがき

日本語の動詞の中で、本来の意味をもった用法以外に他の文節の下につき、したがって語頭には用いられない動詞がある。これらは実質的な意味が稀薄で、他の語について付属的な意味を添えるので、さまざまなアスペクトやそれに似寄りのものを表わし分けるばかりでなく、表現者の感慨や立場を反映させるなど、微妙な主観のニュアンスをふくませたものが少なくない。この種の補助動詞は「書いてもらう」「読んでやる」のように、動詞+テ+補助動詞の型として使われる。形式上では補助動詞は単独で文節を形成することができるので助動詞のような付属語とは異なる。従って「叱られる」「教えられ

る」等は動詞の語尾変化の一種である「単語形態」と呼ぶことができるが、補助動詞を含む構造では「連語形態」と呼称し、通常「迂言法」というべきものである。この研究では、このような迂言法すなわち“語ぐみ”によって動詞の様態の中に言語の情動面がどのように表われてくるか、また外国語による表現文法の立場から見た時、そこにどんな比較が生まれるか、について考察してみたい。

なお、ここで扱う動詞の様態は上述のような連語形態のものに限定する。一般には動詞+テは動詞の第二中止形と呼ばれるが、宮田幸一『日本語文法の輪郭』では、シテ分詞と呼び、補助動詞を小動詞としている²⁾。また、三上章『日本語の構文』では補助動詞を本動詞に対して添動詞と呼んでいる³⁾。いずれも補助動詞の特殊機能に注目した命名であるが、本論では便宜上シテ分詞+

*外国語系列 (Department of Liberal Arts and Sciences
—Foreign Languages)

補助動詞と呼ぶことにする。引用した例文に対応する訳文には、その表現のしかたにおいて両者の距離の近さを感じさせるものと、そうでないものがある。前者の場合にはできるだけ日英語比較研究の立場から取り上げることとし、後者の場合は表現法研究の資料としての意義を認めたいと思う。

I

かかる連語形態の特質になじむために、最初に取り上げたいのは提供態あるいは利益態と呼ばれるものである。おなじ「辞書を買う」という動作でも、

(1) AがBに辞書を買ってくれる。

(2) AがBに辞書を買ってやる。

のように、「買う」という動作を主体がだれのためにするか、話し手が主体の側に立つか対象の側に立つかによっていろいろな言い方ができる。従って、上の例では、(1)は他の行為が自己の利益となる形で近供態と言い、(2)は自己の行為が他の利益となる形で遠供態と呼ぶ。近供態はシテ分詞に補助動詞クレルを連ねたもので、ていねいな言い方の場合にはクダサルとなる。遠供態はシテ分詞に補助動詞ヤルを連ねたもので、ていねいな言い方の場合にはアゲルとなる。ヤル、クレルは上述のように動作の背後にある動作者の好意や思いやりの方向を表わすところから、しばしば好意の提供者と受益者が発話の中に現われないでも支障をきたさないことがある。

「それじゃ、帰る時連れて行ってあげようか」

「ええ、連れて帰って下さい」

川 端 康 成『雪国』

「何を仰っしゃるのよ、いちめんどころか為を思ってあげますのよ。……」

谷 崎 潤 一 郎『細雪』

英語ではそのいずれも省略しない。元来この種の様態を生む動詞は help, tell, lend, show, love 等、それ自体に利益提供の意味を含んでいるものが多く、動詞を中心に主語と目的語との間で提供の様態が成立する。もっとも受益者を目的語に取りえない構文では他の devices を講じるとか、文脈の助けを借りるなどの場合が考えられる。なお、ヤル、クレルは話し手の心態に関係することで、そのいずれにも属さない単純形が存在するが、これは一応論外とする。次に日英語の比較資料として例を挙げてみる。

〔近供態〕

イ. 村人たちはしきりにもてなしてくれました。

They treated us royally.

竹山道雄『ビルマの豎琴』(Howard Hibbett)⁹⁾

ロ. 若い村人が十人ほど並んで、この民謡をきかしてくれました。

About ten young people from the village stood in a row and sang us one of their folksongs.

—*ibid.*

ハ. ピistolをつきつけて、「おまえのルーンジとこのバナナの葉をとりかえてくれ」というのです。

Pointing a pistol at you, they say, "Trade me your longyi for this banana leaf!"

—*ibid.*

ニ. "Don't be angry, uncle. Come! dine with us tomorrow."

「伯父さん、そう腹を立てないで下さい。どうか明日食事に来て下さいな」

—Dickens: *A Christmas Carol*

(村岡花子訳)¹⁰⁾

ホ. "Leave me! Take me back. Haunt me no longer!"

「私から離れて下さい! 私を連れ戻って下さい。二度と私につきまとわないで下さい!

—*ibid.*

〔遠供態〕

イ. 「駒ちゃんはいいいんですけれども、可哀想なんですから、よくしてあげて下さい」

「しかし、僕には、なんにもしてやれないんだよ」

"Komako is a fine person, but she's not been lucky. Be good to her."

"But there's nothing I can do for her."

川端康成『雪国』(E. G. Seidensticker 訳)¹¹⁾

「よくしてあげて下さい」は遠供と近供の併用態である。Be good to her. と軽く片づけられているのと比較してみると、日本語の補助動詞の中にこもる日本人の心情の婉曲表現をうかがうことができる。

ロ. われわれはうたいながら、この目の前の景色を故郷の家の人たちに見せてやりたい、この歌の声をきかせてやりたい、と思いました。

As we sang we thought of our families and wished we could show them this landscape and let them hear our song.

『ビルマの豎琴』

ハ. "I've got to cut your hair before long," his mother said.

「そろそろ頭を刈ってあげなくてはいけないね」母

親は言った。

—Steinbeck: *The Red Pony*

(西川正身訳)⁹⁾

提供態が好意の提供を意味しない場合がある。

- ニ. “Let me hear another sound from you,” said Scrooge, “and you’ll keep your Christmas by losing your situation!”

「もう一辺そんな音を立ててみる、失業クリスマスを祝わせてやるから」とスクルージは言って置いて…

—*A Christmas Carol*

他人への利益をよそおった損害の提供というべきであろうか、警告、脅迫を表わす。

次例は形式は自行他利態であるが、自己に対する提供態である。時には近所迷惑な自己の行為を恩着せがましく言うことになる。

ホ. —いや、自分は口笛をふいて自転車にのって、伝票をもって銀座の町を走る。そうして、かえりは映画を見て、みつめを食ってやろう……。

“I’m going to go whistling along on my bicycle, delivering vouchers around the Ginza. And on my way back to the office I’ll stop in for a movie and a snack.”

『ビルマの豎琴』

へ. 或時はあまりに世話を焼かれ過ぎるのに腹を立てて、注意される襟巻をわざと解きすてて風邪を引いてやった事もあった。

Sometimes her excessive solicitude irritated him. He would deliberately untie his muffler because she had cautioned him about it, even if it meant catching a cold.

永井荷風『すみだ川』(Donald Keene 訳)⁷⁾

提供態は好意の発動者の立場から見た様態であるが、好意を受ける側から見た場合には受納態となる。シテ分詞にモラウを連ね、ていねいな形ではイタダクとなる。他の者から提供された好意を喜んで受入れたり、好意の提供を依頼することを表わす。受動態に似ているが、動作者の好意に対する謝意を含むという点で単なる受動態とは異なる。受納態は宮田幸一氏の命名であるが、松下大三郎博士はこれを自行自利態と呼ぶ。実際の動作をするのは他人であるが、モラウ、イタダクの主体は自分であるところから、そう名づけたわけである。

イ. 「そんなら、貞之助兄さんに付いて行って貰はう」

“We can have Teinosuke go with you, then.”

谷崎潤一郎『細雪』(E.G. Seidensticker 訳)⁸⁾

ロ. 自分はイギリスの将校にたのんだ。——どうかわれわれのうちの一人をその村にやって、説得をさせても

らいたい。

I asked a British officer to let one of us go over and to talk them into giving themselves up.

『ビルマの豎琴』

「館内では係員の指示に従っていただきます」、「切符は自分で買っていただきます」のように好意の提供を規則や義務として要求する場合がある。次例クリスマス・キャロルの一節がそうである。

There is no doubt that Marley was dead. This must be distinctly understood, or nothing wonderful can come of the story I am going to relate.

さて、マアレイの死については、一点の疑もない。このことをはっきり了解して貰わないと、これから話そうとすることが何の不思議でもなくなってしまう。

次の例では、主体の強い決意、意図を他人を意識において実現しようとする気持を表わす。

「おどかすなよ」

「しかし、私はお仲人として、今日は注文を出させていただきます」

“You sound very threatening.”

“But I’m the go-between, and I’m to have my say.”

川端康成『千羽鶴』(E. G. Seidensticker 訳)⁹⁾

II

提供態が動作の背後にある主体の好意、または思いやりの方向を表わすのに対して、動作そのものの方向を表わす様態がある。いわゆるクル、イクの関係である。宮田氏によれば、言語活動の場面において主体あるいは話し手の方に近づく動作を近向態、遠ざかる動作を遠向態と呼び、この二つを称して方向態という。シテ分詞にクル、イクを連ね、次のように空間的移動を意味するものと時間的変化を表わすものとに分類できる。

1. 元来は動詞の「来る」、「行く」が補助的に用いられたのであるから、動作そのものの空間的な近づき、遠のきを表わす。従って、次のような例では、シテ分詞と補助動詞との間でいずれが本体の動詞になるのか疑問視される。日本語の場合には、形式的にはクル、イクは補助動詞であるが、英語ではこれが本動詞となる場合が多い。

イ. そのときに、一人の戦友が息せききってこの収容所にとびこんできました。そうして大声で叫びました。

Just then one of our men came bursting

into the hut, yelling at the top of his lungs.

『ビルマの豎琴』

ロ. ときどき小蒸汽船が豚の尻尾にいた煙の輪をあけて、ポンポンとかかる音をたてて、とくいそうにそのあいだを走りぬけていきました。

Now and then a small steamboat would proudly go puttering by between them, sending up a curling wreath of smoke.

— *ibid.*

ハ. The fog came pouring in at every chinks and keyhole,...

霧はどんな隙間からも鍵穴からも流れ込んで来た。

— *A Christmas Carol*

次例のように、動作が現に行われながらも、その動作の主体そのものはどの方向にも動かない場合がある。

ニ. あの草色の制服をきて、曲った短刀を革帯にはさんだ標悍な土民兵は、森の中の木によじのぼっていて、われわれが下を通ると、急に上から自動小銃で掃射をしてきました。

These ferocious soldiers wore green uniforms and had curved daggers stuck in their leather belts. They would wait in the trees and, as we passed below, sweep us with a sudden burst of automatic rifle fire.

『ビルマの豎琴』

以上の例では、シテ分詞と補助動詞による連語形態そのものの表わす動作が方向を持っているが、次の例では、ある動作が一度行われた上で行ったり来たりすることを表わす。過去のことからについては、英語では時制の操作によって表わすことができる。

ホ. 次の次の駐車場の町まで、あの年増芸者を見送って来たのだと言った。

She had seen the old geisha Kikuyu to the second station down the line, she said.

『雪国』

ヘ. 島村は出発の前に駅の売店でこころあたりの山案内書の新刊を見つけて買って来た。

Shimamura had bought a new guide to these mountains while he was waiting for his train in Tokyo.

— *ibid.*

次のような例に見られる様態は英語では無理である。「行ってまいります」、「行ってらっしゃい」によって代表される日本語独得の表現である。

ト. 「観音さまの市だわね。今夜一所に行かなくて。あたい今夜泊っててもいいんだから」

"Let's go to the fair at the Kannon Temple.

I'm allowed to spend tonight at home."

『すみだ川』

チ. 「寄って行って」

「だって今頃」

"Come on in."

"But think of the hour."

『雪国』

2. 以上が主として空間的移動を表わすのに對して、次の例では時間的变化を表わす。

1) 動作のはじまりを表わす。これは近向態に限られるようである。

イ. 一時とだえた追懷の情が流るるように漲って来た。

The flow of recollections, checked up for more than hour, came suddenly flooding in again.

田山花袋『一兵卒』(G.W. Sargent 訳)¹⁰⁾

ロ. そんなことを思つて夕日の山を眺めていると島村は感傷的に人肌がなつかしくなつて来た。

Looking out at the evening mountains, Shimamura felt a sentimental longing for the human skin.

『雪国』

ハ. 草葺の屋根の上にあがる白い月が一晩ごとに大きくなるにつれて、この部落ににぎやかな浮きたつような気分がみちてきました。

About that time the moon was waxing, each night rising larger over the thatched rooftops, and as it brightened, a gayer and gayer spirit seemed to well up in the village.

『ビルマの豎琴』

ニ. She was angry when she came, but when she looked in at the pony and at Jody working over him, she felt a curious pride rise up in her.

彼女はぶんぶんしながらはいつてきたのだが、小馬とその世話をしているわが子の様子をうかがい見ているうちに、なんとも言えない誇らしい氣持が湧き上つてくるのを感じた。

— *The Red Pony*

なお、この様態は動作の始動点にとどまることなく、その後の時間的变化にも比重がかかっているため、次に述べる動作の進行や展開の様態とはっきりした区別をつけがたい場合がある。

3. 動作の進行や展開を表わす。

イ. 視覚は遠い灯を感じるだけだった。足の踏む感覚も視覚を離れて、如何にも不確だった。只頭だけが勝手に働く。それが一層さういふ気分自分に誘つて行つ

た。

My sense of sight took in only the distant lights, and the feel of my feet against the ground, cut off from my sight, seemed uncertain in the extreme. Only my head worked on as it would. It led me deeper and deeper into these fancies.

志賀直哉『城の崎にて』

(E. G. Seidensticker 訳)¹¹⁾

ロ. “...I have seen your nobler aspirations fall off one by one, until the master-passion, Gain, engrosses you. Have I not?”

「……私はあなたの気高い向上心が一つずつ枯れ落ちて、とうとう、お金儲けという、一番大きな欲がすっかりあなたを占領してしまうのを見て来ましたのよ。そうじゃありませんか？」

—A Christmas Carol

このように近向態が時間的変化の終結点の方向に動くのに対して、遠向態はその始動点から展開の方向に動いていく変化を表わす。なお、敬称的用法のイラッシャルでは近向態と遠向態は同じ形になる。

III

提供態と方向態がいずれも心態的、空間的、時間的にそれぞれ遠近性を持っているのに対して、このカテゴリーに属さない様態がある。その一つは定置態または解決態と呼ばれるものである。シテ分詞に補助動詞のオクを連ねた形で、準備、放任、さしあたっての解決の三態を表わす。

1. 次に行われたり、生じたりすることがらのための準備としてなされる動作を表わす。英語に訳出する場合には時制の操作で片づく場合が多い。

イ. 「いやだろうけれども当分辛抱しなさい。親孝行して置けば悪い報はないよ」

“I know you must hate it, but for the time being please be patient. You'll never regret having been a good son.”

『すみだ川』

ロ. 昨夜、ちか子は北鎌倉まで帰るので、稲村令嬢といっしょに出て行ったが、後かたづけは女中がすませておいた。

Chikako, who lived in Kamakura, had left with the Inamure girl. The maid had cleaned the cottage.

『千羽鶴』

ハ. 教師に出すべき代数の宿題は一つもやって置かなかった。

He had not succeeded in solving a single one of the algebra problems which the teacher assigned.

『すみだ川』

ニ. 「——自動車云うといてんか、もう十分したら来るように」

“Call a cab. Have it come in ten minutes.”

『細雪』

ホ. はなれたところで声がしました、「おい、やめろ。やめろ。またあしたは作業だ。少しでもよけいに寝ておけ」

“Quiet!” a voice called out. “We have work to do tomorrow — let's get a little sleep!”

『ビルマの竖琴』

2. 放任、放置の動作を表わす。これは準備や、さしあたっての解決のいずれかに入らなくもないが、動作に積極性がないのが特徴である。英訳の場合には let, leave などの動詞が用いられる。

イ. 他から余り厳しく干渉するよりは却って気まかせにして置く方が薬になりはしまいかと論じた。

He held forth to the effect that the best course was not to interfere but to let the boy have his way for the time.

『すみだ川』

ロ. 「あんた達のこと、あたしには分ってるけれど、一今のとこ何も云はんと、任していってえな」

“I understand how you feel, but I hope you will leave everything to me.”

『細雪』

3. さしあたっての解決としての動作を表わす。

イ. 「なあ、雪子ちゃん、どない云うとかう」

「どないなと云うといて」

「さうかて、あの人、味善う云はなんたら承知しやはれへんねん」

「そこのとこ、ええやうに頼むわ」

「そんなら、兎に角、明日のとこだけ見合せてもろとくわな」

“What shall I say, Yukiko?”

“Whatever you like.”

“Not just any answer will do.”

“I leave it to you.”

“Shall I refuse for tomorrow, then?”

『細雪』

ロ. とにかく一応は私が意見しますよ、若い中は迷うだけに却って始末のいいものさ。今夜にでも明日にでも長吉に遊びに来るように云って置きなさい。

I'll talk to him. Personally, I think it's better in the long run for a boy to be unsettled when he is young. But tell Chokichi to come and see me tonight or tomorrow.

『すみだ川』

ハ. "...What shall I put you down for?"

「……で、御寄付はいかほどといたして置きましょうか？」

— A Christmas Carol

IV

シテ分詞にミルを連ねると、試みにある動作を行なうことを意味する様態ができる。これを実験態または試み態という。この様態は、英語では try, see, wonder などの動詞や、助動詞 will と他の動詞との組合わせなどで、比較的容易に表現することができる。

イ. 「バナナの葉の腰巻は涼しくていいものだぞ。きみたちもやってみる」と負け惜しみをいいました。

"A banana leaf makes a nice cool outfit," he answered. "Why don't you try it?"

『ビルマの竖琴』

ロ. 「どうやら、——ちょっとあの帯搜して見て、こいさん」

"Would you see if you can find it, Koi-san?"

『雪国』

ハ. 葉子は汽車を見送って、「弟が乗っていたから、駅へ行ってみようかしら」

"My brother," said Yoko, looking after the train. "I wonder if I should go to the station."

『雪国』

ミルは元来動詞の見るであるところから、これを本動詞と考えるべきか補助動詞と見るべきか、いずれでもよい場合がある。

ニ. 橋をわたりおえて河原に下りてから、ふりかえって見ると坊さんは河原を歩いていました。彼はひどく足をいそがせて町とは反対の北の方に行きましたが、…

After crossing the bridge, we turned and saw the monk walking very rapidly along the opposite bank, heading north away from town.

『ビルマの竖琴』

ミルはこれに先行するシテ分詞による動作を意志的にする働きを持つが、次のように無意志的または無意識的にする動作を表わす場合がある。

ホ. 気がついてみると、私は手あつい介抱をうけていました。傷は手当をして包帯をしてありました。家は粗末な草ぶきですが、涼しい風がとおっていました。

When I came to, I was lying in a primitive thatch-roofed hut cooled by a pleasant breeze. My wound had been carefully bandaged.

『ビルマの竖琴』

ヘ. Sometimes, if the work-horses were to be used that day, Jody found Billy Buck in the barn harnessing and currying.

時おり、轡き馬に仕事をさせる日など、ジョーディが馬小屋へ行ってみると、ビリー・バックが馬具をつけ、馬の毛に櫛をあてているところに行きあわせることがある。

— The Red Pony

このほかにシテ分詞にミセルを連ねた形の提示態と称するものがある。これは他の人に動作をして見せることを表わす。このミセルには本動詞としての意味が多分に含まれているためか、補助動詞としての機能に注目している研究書が多くない。提示態というよりは第二中止形に他の動詞が続いた構造として扱おうとする立場もあるわけである。しかし、このミセルには困難な行為の達成を誇示したり、完徹しようとする強い意志を表現する機能がある。この場合には本動詞というよりは補助動詞と考えた方がよい。「先生がまず書いて見せましょう」と、「ばくだって一回目に跳んでみせる」とでは、様態が異なるように思われるのである。

さらに補助動詞が関与する連語形態の中には、イル、アル、シマウなどのようにアスペクトを表わすものがある。これらはすべてここで論じつくす余裕がなかった。改めて次の機会に取り上げることにした。

ま と め

ものごとを日本語で表現する時には最も日本語的に、外国語で述べる時には最もその国語にふさわしいように表わすのが、表現文法の要諦であるが、この両者の表現構造の比較について、体系的な研究方法を見つけることは容易ではない。任意の日本語表現にはば対応する英語表現はいろいろ考えられ、統一的な原理は見出しがたい。だからと言って問題にすべきものを見過すわけにはいかないのである。ここで扱った日本語の補助動詞は、従来語形を中心とする文法では、普通の動詞と変りない扱いを受けてあまり問題とされていない。けれども表現文法の立場からは大事な項目となるものである。本論は問題提起の段階にとどまったきらいがあるが、さらに整理統合を企てて何らかの方向を見出したいと思うの

である。

引用文献

- 1) 宮田幸一『日本語文法の輪郭』 pp. 80—95, 1948, 三省堂
- 2) 三上 章『日本語の構文』 p.5, 1963, くろしお出版
- 3) 竹山道雄『ビルマの竖琴』 *Harp of Burma*, Translated by Howard Hibbett 1969, Charles E. Tuttle Co.
- 4) Charles Dickens, 村岡花子訳: *A Christmas Carol* 『クリスマス・カロール』 1964, 新潮文庫
- 5) 川端康成『雪国』 *Snow Country*, Translated by Edward G. Seidensticker 1957, Charles E. Tuttle Co.
- 6) John Steinbeck, 西川正身訳: *The Red Pony* 『赤い小馬』 1968, 新潮文庫
- 7) 永井荷風『すみだ川』 *The River Sumida*, Translated by Donald Keene 1970, Charles E. Tuttle Co.
- 8) 谷崎潤一郎『細雪』 *The Makioka Sisters*, Translated by Edward G. Seidensticker 1958, Charles E. Tuttle Co.

- 9) 川端康成『千羽鶴』 *Thousand Cranes*, Translated by Edward G. Seidensticker 1958, Berkley Medallion Books
- 10) 田山花袋『一兵卒』 *One Soldier*, Translated by G.W. Sargent 1970, Charles E. Tuttle Co.
- 11) 志賀直哉『城の崎にて』 *At Kinosaki*, Translated by Edward G. Seidensticker 1970, Charles E. Tuttle Co.

参考文献

- E. G. サイデンステッカー・那須聖『日本語らしい表現から英語らしい表現へ』 1967, 培風館
- 国広哲弥『構造的意味論——日英両語対照研究——』 1967, 三省堂
- 風間力三『表現のための日本文法』 1964, 東京堂
- 空西哲郎『英語・日本語』 1963, 紀伊国屋新書
- 佐久間鼎『日本語の言語理論』 1966, 恒星社厚生閣
- 教科研東京国語部会・言語教育研究サークル『文法教育』 1968, 麦書房
- 国語学会編『国語学辞典』 1969, 東京堂出版
- 『日本文法講座』 1, 5, 6巻, 明治書院